

段違い平行棒における〈後ろ振り～前方かかえ込み 2 回宙返り下り〉に関する一考察

新竹優子

(筑波大学大学院)

背景と目的

発表者が現役時代に得意としていた技の一つに、段違い平行棒での〈後ろ振り～前方かかえ込み 2 回宙返り下り〉がある。発表者はこの技を習得し試合で用いる中で、「こうやれば絶対に成功できる」という、コツに関する確信的意識を持っていた。

この技の習熟過程において掴んだコツのうち、とりわけ重視していたのが、着地を安定的に成功させるために「着地前に両手を後方に引き、着地するタイミングに合わせて手を後ろから前へ出す」というコツ（以下〈手のコツ〉とする）であった。発表者が頼りとしていた〈手のコツ〉は、単に練習場面で成功率が高いということではなく、どんなに緊張した試合場面においても確信をもって「できる」という、発表者にとって「命綱としてのコツ」であった。

一般的にみて、多くの選手は着地の際に「かかえ込んでいた手をそのまま前方や下方に出し、膝を適度に屈曲させる」というコツを用いているが、発表者の〈手のコツ〉の特徴は、こうした一般的なやり方とは異なるものである。

しかし、なぜ一般的なやり方とは異なる〈手のコツ〉が発表者にとって意味を持ったコツとなったのか、他者にも共有可能なコツなのかという疑問が浮かび上がる。そこで本研究では〈手のコツ〉に関して発生運動学における地平論的構造分析*を行い、コツの意味構造を明らかにすることによって、指導現場で有効な知見を導き出すことをねらいとする。

方法

発生運動学における地平論的構造分析では、現象学的形態学の「本質直観の方法」が用いられる。本質直観の方法とは、範例に基づいて「変更作用の多様性を生産しつつめぐりあるく段階」、次に「持続的な重なり合いのなかで、対象を統一的に

結合する段階」、そして「差異との対比のうえで合同なものをとりだし能動的に同定する段階」という、三つの段階で事象の本質を捉える方法である。

本研究においては、はじめに筆者自身によるコツを範例として取り上げ、そのコツを想像的に自由変更した場合にどのような結果になるのかを分析する。この分析過程の中では、変更作用の分析としてとりわけ「消去法」が重視される。つまり、故意にある意味核を消去することによって、「うまくいかない動きかたを順に確認していけば、最後に命綱としての身体知の意味核に出会うことができる」ということが確認されるのである。

結論

分析の結果〈手のコツ〉は、回転度合いの調整、上体の起こしの助勢、着地時の足の振り込みの代替、緩衝補償動作、そして、重心位置の調整としての意味をもつことが分かった。さらに本研究を通して、以下の結論が導き出された。

結論 1) 着地の安定化には「緩衝機能」、「バランス機能」、および「着地の先取り」が欠かせない技術であり、発表者はそれらの課題を達成しやすくするための手段として〈手のコツ〉を使っていた。

結論 2) 促発指導においてコツを伝える際には、課題とする運動の技術を理解した上で動きの意味を捉える必要がある。

結論 3) 〈手のコツ〉は、他者と共有できる可能性がある。

* 地平論的構造分析…自我身体の運動に隠れている潜在的な志向体験の意味核を明るみに出すことを目的とした分析法。